

ジェンダーと日本的父性論

山 添 正

A Psychological Consideration on the Victimization and Personal Growth of Father in Japan

Tadashi YAMAZOE

筆者はこれまで、様々な「日本的父性論」¹⁾²⁾³⁾を述べてきた。ここでさらに新たな視点より述べてみたい。それは「日本的父性」を夫婦関係の視点より考察することである。

1. 父はあわれか？

日本が母親中心の文化であることは、筆者がいうまでもないことである。これまで様々な研究者が指摘している。中根のタテ社会論、土居の甘え論そして河合の母性社会論等である。日本の父性をどう考えたらいいのかについて考えをめぐらせているとき、ふと手にした植物の本にチチコグサについてのこんな解説があった。

事例1

ハハコグサに似た草でやや貧弱。若いときはまだよいが、すこしたつと茎がひょろひょろと伸びて全体が薄汚れ、栄養失調の男がボロをまとったようなあわれな姿になる。この名がつけられたころはよほど女権が強かったものと思われる。丈は10~20センチ。ふつう見かけるのはあわれな姿になったときのほう

が多い。⁴⁾

この説明を読んでいて、疑問を持たずにおれなかった。「茎がひよろひよろと伸びて全体が薄汚れ」た状態がなぜ「栄養失調の男がボロをまとったようなあわれな姿」と形容され、それに「チチコグサ」と命名されねばならないのか理解に苦しまざるをえなかった。「よほど女権が強かった」ということであるが、「あわれな姿=父」というのが理解できない。

「あわれな姿」というのは、母の食事を食べることが出来ずに「栄養失調」になり、母の世話を受けることが出来ずに「ボロをまとって」いることを指しているように思われる。つまり母の愛を受けることが出来ない、母から切り離された男の姿を表現しているように思われる。それは男は女手無しでは食事もできず服も選べない「あわれ」な存在であることを意味しているように思われる。

筆者が大学院生のころ「育つことのうちそと」⁵⁾ という本のなかで、「母性から父性へ」というタイトルの執筆のため大学生の父親イメージを調査した。まず女子学生の口から出たのが「かわいそう」という言葉だった。朝から晩まで家族のために働いて、女子学生自身からもあまり感謝されることがない。休みの日には疲れて家で寝ているばかりで楽しみがない。自身の父への敬意のなさに対する反省もこめて「かわいそう」という言葉がまず発せられた。ある女子学生は不思議そうに「そういえば、子どもから無視され、お母さんにも相手にされないで、一生懸命働いてる父は何を生き甲斐に生きているのかしら？」といま始めて父の気持ちに思い至った風な言い方をした。その時、筆者は本当に「日本の父親はなんと自己犠牲に生きながら報れない存在なのか！」と思わずにはいられなかった。⁶⁾

2. 仮想的権威と現実的権威

父を母が「たてる」ことにより、「父の権威」を子どもの心にイメージさせることは可能である。「家父長制度」というのは、実は父の本当の権威のなさ

を補うために、母親が父は権威があるかの如く振る舞ってきたことであった。「本当の権威」というのを「現実的権威」とすると旧来の妻に「たててもらった」権威は別の名前と呼ぶ必要がある。それを仮に「仮想的権威」と名付けることにしよう。この両者の区別をするために、大橋巨泉の自伝から以下に引用する。

事例 2

ぼくには家庭と呼べるものが3つあった。ひとつは当然生まれ育った大橋家。どちらかといえば、家長支配の古い家族制度が律していた家庭であった。母はすべて「まずお父さんから」といっていたし、実際ぼくたち子どもは父が怖かった。寡黙であり叱言をいわないのだが、ギョロッとにらまれただけで、ふるえあがったものである。一方の母は叱言が多く、「お父さん、何かいってくださいよ」というと、父は「放っておけばよい。いってわからないものは、たたいてもわからない」というのが常だった。ぼくのつけたニックネーム「放っつけ親父に愚痴ぶくろ」そのものの家庭であった。(略) …したがってぼくは、大橋家は戦前の家長支配型の家だと思っていたのだ。

ところが真実は違っていた。大橋家の核は実は母のらくの存在であり、これを失ったとき、この家はバラバラになってしまうのである。それは1954年であった。(略) …そしてこの年の秋が深まると、母の容態は日に日に悪化して。筋腫だと思っていたものが、悪性肉腫に転じていて、もう手術もできない状態になった。ガンは体中に転移しており、手の施しようもなかった。12月19日、母らくは53歳の若さで、帰らぬ人となったのである。(略) …あれほど若く、生き生きと仕事をしていた父が、急に老け込んでしまった。55歳で真っ黒だった父の髪に、白いものが混じるようになった。いつも上の空のようで、ぼくが冗談をいって笑わせても、すぐに虚ろな表情に戻ってしまう。父と母が童貞と処女で結婚し、お互いに異性を知らないほど愛し合っていたことは聞いてはいたが、これほどの傷心状態になろうとは、想像もできなかった。(略) …母こそが大橋家の絆だったのだ。その結び目を失った大橋家は、全くバラバラになっ

てしまったのである。⁷⁾

「母はすべて『まずお父さんから』といていた」という母に支えられ、父は大橋家の子どもたちに「家長」としての権威を認められていた。「寡黙であり叱言をいわないのだが、ギョロッとにらまれただけで、ふるえあがったものである」。ところが母がなくなると父は「傷心」のため立ち直れなくなり、家族を支えるどころか、支えてもらえないと生きていけなくなり、家族はバラバラになってしまうのである。子どもに映った父の権威は実は母の演出であったのである。子どもの中での父の権威だけを問題にするならば、母の演出による依存的「仮想的権威」も自律的「現実的権威」も同様の働きをしている。

大抵は女性の方が長生きするので、化けの皮を剥がされることなく多くの日本の父は死ぬまで権威を全うすることが出来た。しかし、大橋家のように母が先に亡くなってしまうと父の権威は母の演出による「虚構」であったことが露顕してしまう。大橋家の場合「現実的権威」は母が実質的に担っていたのである。

3. ステレオタイプ夫とパーソナル夫

筆者の臨床現場には「セックスレス」の夫婦が多くなっている。⁸⁾たとえば不登校の親の面接で、子どもの問題が一段落すると「実は、もう1年以上も夫婦関係がないのです」という話が展開する。子どもの問題よりも中年夫婦の関係のほうが深刻な場合がある。また筆者の教え子にあっさり「先生、我々は1年以上ないんです」という会話をされてどう答えたらいいのか困ったことがある。というのは彼らがそれで困っているのかそれでよしとしているのか分からないからである。男のほうは問題にしていることが多いが、妻のほうは分からない。妻からセックスを拒否されたときに男のほうはどう対応したらよいか分からないようだった。ある教え子は、妻に拒否されたので1年以上セックスを自分のほうからも求めていない。それを同窓会仲間に自慢しているようだった。セックスをしている男は女に媚びている様な言い方をしていた。

事例3

セックスレス夫婦。夫40歳，妻40歳

1年半セックスレス。彼としてはどうしても不自然だという気持ちが消えない。妻は仕事を見つけ，子育ても終わったので楽しそうな毎日を送っているのがまた腹立ちのもとでもある。しかし「セックスしたい」ともう自分のほうからはいえない。「男のこけんにかかわる」という。「自分のプライドが許さない」とも。1年半が過ぎた今でも，自分の方からいいかけては自分の部屋に戻ってしまう。そのたびにまた自分が男として情けない自嘲的な気分になってしまう。つまり「セックスしたい」ともいえない自分も情けないし，セックスしないでいる自分も情けない，いずれにしても情けない自分自身に腹を立てている。そんなことにこだわっている自分もなさけないと思っている。

そのうち，妻とセックスしようと思っただけで心臓がドキドキしだした。だんだん悲観的に物事を考えるようになり，鬱状態に陥る。筆者はとにかく夫婦関係を維持するために何か夫婦で出来ることを始めるよう助言する。それで2人で園芸をはじめ。ガーデニングに集中しだす。ある日曜日2人はいつになく仲良く草むしりや花の苗の植えつけや肥料やり等「調子がよかった」と夫の言葉。さらに「都合がよい」と思った。子どもがテスト前でいつになく早く部屋に戻って，1年半ぶりに2人きりになる。突然，妻の横に座ると，奥さんは逃げる。それで電気を消して，ソファーでせまろうとすると，奥さんは夫の手を振り払う。夫によると「ゴミのように投げ捨てられた」とカウンセラーである筆者に訴える。妻は自室へ。余りのショックに，妻が怖くなり，また自分のやったことの説明が自分につかなくなると恥ずかしくなり，次の日から一週間家出。

自分の生まれた故郷（父も母も死亡）に帰り，自分の家の墓石を抱いて泣く。しかし子どものことが心配で，この家出中別居・離婚を考えたが帰宅する。帰宅後も妻と顔を会わさないように食事を断ったりしていたが，妻のほうから話し合いの要請があり，話し合う。妻にすれば「衰えた…」とか「もう性欲がない…」と見えを張って妻の前で主張していたことが真実とあっていただけに，

経過を理解することが困難だった。「夫はもう性欲はないものと…」妻は思っていた。夫のほうは「妻は楽しそうに働いているので、もう性的欲求はないもの…」と思っていた。ただ両者とも子どものことを意識すると落ちついて家ではセックスできないと思っていた。話し合いの結果、両者に誤解があったと理解に至る。

この事例にたいする筆者の助言つまり治療過程は次のとおり。

筆者はカウンセラーとして、夫に妻に対してセックスの意味を話すように助言した。「いったいセックスをやる意味はどこにあるか、それをいってみてください」と夫に質問した。夫の答として「まず快感がある。ストレス解消にもなる。それから男としての自信がてでくる。それから夫婦のつながりみたいなものを感じる。人間としてのつながりを感じる」。これはセラピーのプロセスであるが、「それを妻にいうべきだ」と助言した。これは論理療法でいう「宿題」にあたる。訴えるだけではいけないので、具体的な提案もするよういいう。「かっこうつけずに自己アピールするしかないこと、自分の自尊心もなにもかなぐりすてて、妻に素直に自分の愛情表現をするといい」と助言した。

「私はあなたを愛している」（筆者の自我機能論でいう『自→他』）というふうな言動は、日本人としてはちょっと下品な言い方かもしれないが、それが自分を苦しみから解放し、男としての自信をもたせ、夫婦の心のつながりを感じるといふことであるならば、そういうふうにいふべきだと。つまり問題をかかえていると思うならば、その問題に対して自分がイニシアチブをとり、自分の責任で解決するよう助言した。

家族の世話は妻まかせ、問題の解決に向けて、妻に対してすらイニシアチブがとれない。話し合いすら持てない。そしてかって自分の母親に対して良い子であった時の自分を演じる。しかし問題を避けて庭いじりをはじめても、彼の精神的苦しみは増すばかりであった。「ゴミのように捨てられた」のだから、何もかもかなぐり捨てて、ゴミから立ち直るといふか、ゴミのなかから自尊心や自分の人生にとって大切なものを獲得していく努力をするよう助言した。

いつも人に指示されて人任せの受動的な人生を脱却し、最初に自分のほうか

ら行動を起こすイニシアチブは大事なことである。また問題が何かを話し合う。コミュニケーション能力というのは問題解決のためのスタート台であり、以心伝心で自分の気持ちは口に出さないでも分かったという時代ではない。したがってやむにやまれぬとはいえ、家出（自我機能論では『自←他』）したことは夫婦の問題をあきらかにし、関係修復に役立ったということで結果的によかったことになる。それも子どもが不登校で以前より家族のなかに部外者であるカウンセラーを相談者として受け入れる素地がなかったらこうした展開はありえなかったと考えられる。

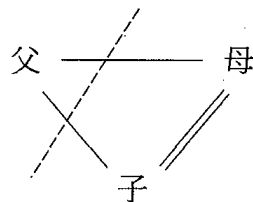


図1 日本の家族関係

日本の文化は図1にあるように、夫婦の絆は1本であり、子どもと母の関係は2本になり、さらに悲しいことに母・子と父との間にはミシン穴が存在する。つまりいつでも切り離すことが可能であることを示している。単身赴任・海外出張・残業等のことを指す。「ちちこぐさ」の解説どおり、父とは悲しい存在といえるかもしれない。しかし感傷にふけていても何も解決されない。日本の場合、家庭教育というか一般に家の問題は女性がイニシアチブをとってしまっている。だからせめて夫婦関係から男性のイニシアチブを取り戻すことはできないものか。

夫がステレオタイプな社会規範に従い、妻が同じようにしたがってくれば、何も問題は発生しない。こうした夫婦がほとんどで現実には「男尊女卑」の日本のステレオタイプの社会規範で苦しんでいるのは女性のほうであることは理解しているつもりである。しかし、いったんそのステレオタイプの規範から離れると、あとは人と人との「実存」をかけた関わりしかない。そこに西洋は神が入ってくるが、日本人にはそうした援助もない。文化も助けようとしない。

夫婦でどんなに苦しんでいても、人前にでるとにこやかに何も問題がないかのようふるまわなければいけない。まして「セックス」など口にするのも憚られる。そうして妻は友達の旅行にうち興じ、夫は仕事と趣味にあけくれる。広い宇宙で出会った二人はあたかも何の関係もないようにふるまい、世間には何の問題もないように振る舞いつづける。かくして家庭内別居はセックスレスとなり、夫婦別々の人生という仮面の夫婦になって、夫婦という戸籍だけが残り、夫婦の内容は何もない日本人の人生を終える。

永六輔の「夫と妻」⁹⁾ という本の最初のところに「10代の夫婦はセックスで夫婦、20代の夫婦は愛で夫婦、30代になると努力して夫婦、40代になると我慢の夫婦、50代になるとあきらめの夫婦、60代になるとお互い感謝でやっと夫婦」と書いてある。このお話を、今までお話してきたセックスレスのテーマと関連させると、10代の夫婦はセックスで夫婦でこれは考え方によると一番自然な動物的な純粋なものかもしれない。それから、20代はプラス愛で、30代になるとすこし努力しないとセックスレスが増えてくる。何をするにも30代になると努力が必要になる。40代になると何事も自己中心を我慢しなければセックスレスのパーセントが上がるしかない。50代はあきらめて完全にセックスレスになる。

以上の話は日本的すぎるかもしれない。セックスレスというかたちで何をコミュニケーションしているのか。「仮面の夫婦」といってしまうと何の関係もないが、自分中心のセックスを強要していた夫が、はじめて妻のペースを認めるというか、性のみならず全てのことで自分中心をあきらめることで何か一つお互いに完成してやっと夫婦になれるのだろうか。

アメリカでは何度か離婚しながら、相手・組み合わせを変えながら夫婦文化を完成させていく。ところが日本の場合にこの取り替えは大変困難である。数組のセックスレスの夫婦に面接したが、「離婚には結婚したときくらいのエネルギーが必要とされる。その変化を完遂させるエネルギーがでてこない」という。それで取り替えたいという気持ちをセックスレスという形で表現しているのかもしれない。そして我慢するということなので、そのセックスレスという形で、ある意味では人格修業しながら社会的枠組みを守り通して、その全てを

諦めたとき一種の「さとり」としてこの世での夫婦関係を完成していくのかもしれない。

表1 日米夫婦関係変化発展の経過

	外に見える関係	内に守るもの	関係の変化	達成するもの
アメリカ	離婚	自分の愛情	夫妻の取り替え	自己実現
日本	セックスレス	社会的枠組み	夫妻の内的変化	あきらめ

4. 日本人の人格的強さとは？…ひきこもりの意味

何かをしないことに積極的意味を付与すると、不登校は、ひきこもりの形で自己主張していることになる。内にこもるかたちで人格を成長させる。ある子どもは4年間きちんともって、親とも口をきかないで、4年後に出てきて、そして今、何事もなかったかのように働いている。こう考えると、こもるというのは一体どういうことかと問わざるを得ない。ある人は出家修業と類似の現象であると主張している。ちょうど僧侶たちが修業するのに家族とのコミュニケーションつまり世俗との関係を全部断ち切ってやる。一種そういう修業のように、今の子どもたちのひきこもりの姿に、宗教的なものを感じざるを得ない。

なぜなら、ひきこもっている子に誰が命令しても学校には行かないし、出てこないからである。ある人格的パワーがないと動かない。だから勉強できるようになるよとか、そういう世俗的な動機付けでは一切動かない。本人が納得しないと出てこない。

ですから、不登校のあり方は、日本の「何もしないことによって最も多くの仕事をする」という文化の型を反映しているように思う。そして大人も同じことをして人格の成長を待っているようなところがあるように思う。これまで考察してきたように例えば、夫婦別室というのはひきこもりの一種で、夫から妻からひきこもる。セックスレスになる。別室にする。場合によっては別居する。別居する事で自分という人格を確認して、離婚する場合もある。仲直りすることもある。この場合、離婚する人は日本では現在のところ非常に少数派である。

自分というものをきちんと把握しないと離婚はできない。ですからひきこもりは、なんとなく日本文化の一つの有力な型で、日本人の人格の強度は人とのコミュニケーションを断つ力と関係しているかもしれない。

表2 人格成長の訓練の型の国際文化比較

自我機能	訓練の型	変化の対象	対象との関係	事例行動	地域
自→他	何かを「する」ことによる	外的変化	対象の取り替え	離婚	欧米
自←他	何かを「しない」ことによる	内的変化	対象の固定	ひきこもり	日本

5. 日本の父親に必要なのは他の人との精神的連帯？

ひきこもりの子どもは共同体の生活の中に入らない。家族という最も基本的な共同体をも否定する。学校という所属集団にも入らない。それで、セックスレスも考え方によると、夫婦という一つの共同体からのひきこもりと考えられる。日本人は、ひきこもることで自分を守り、自己主張し、自己形成する民族である。そういう人格の作り方は西洋人からみるとまったく理解できない。夫婦の愛情について対話をすれば済む問題を、なぜそんなに3年も4年もそういう状況を続けるのか。

ところが私たちは、そこに何か意味を見つけようとする。ちょうど日本画の余白に意味を見つけるように。ある60代の日本の男性にこの話をすると「日本の男はシャイだから」という言い方をされた。

それはどういうことかという、インテリというか武士の魂¹⁰⁾ などという人は、老年期に入っていまさら「セックスなどいえない」とか、所謂「武士のやせ我慢」というか、おおらかさに欠けるというか、それで、筆者は日本の男をがんじがらめにして身動きを取れなくしてしまっている「武士の文化」の現代的出方に注意している。

たとえば、新潟の女性監禁事件で、警察の体質がいろいろ問われた。キャリアと現場のぎくしゃくした関係があきらかにされた。キャリアの処分に関して公安委員会が大変厳しい世間の批判をうけた。なぜならその公安委員会のある

委員がこういう言い方をしていたからである。「(本部長が) 辞職するというのは切腹だから、切腹を見守るのが武士である」と。これはとんでもないと思った。要するに、監禁されていた女性を救う最高責任者の立場にあった署長が、温泉マージャンにうち興じていた。この最高責任者として被害女性を救えなかった人間の責任を問うことなく、自分の身内の本部長のおなかの切り方が格好いいとか、それを見守るんだという言い方は、本部長を監督する自分の立場も忘れていて。誰をも助けることが出来ない武士など、そんな武士は要らないのではないかと思ったからである。

不登校の親に先祖の話を書くと、「武士の家系」と胸を張っていわれる人がほとんどである。だれも「町人」とはいわない。そんなに日本は武士が多かったわけではないはずである。武士は日本人の特に男の行動の規範を作ってきた一つの伝統的価値観の牽引車であると認める。しかし、あの独特のやせがまん精神は字のとおり、日本人の精神の「のびやかさ」「なめらかさ」を失わせた元凶でもある。なぜなら先述したセックスレスの問題で、妻と愛情について話が出来ない体質は、いじめられている子どもが「僕はいじめられている」といえないのと結局同じことである。

精神科医の野田正彰は、阪神淡路大震災のことを記述した本¹¹⁾で、「日本人が人前で泣かない」ことを述べている。彼は、地震のあと死体安置所へ行って呆然としている親族を見たときも、大泣きしている家族は見たことがなかったという。外国の報道も大災害のあとの日本人のとりみだしの少なさを称賛していることに満足するような体質がわれわれ日本人にはある。われわれは確かに、武士の立派な文化の伝統があるかもしれない。だが「人前で泣けないというのは、あまりいい文化とはいえない」と野田はつづける。「悲しいときに悲しいと人前で泣けないというのは、基本的に人に対する不信感がある。要するに、連帯しようとしていない」と強く主張している。なぜ身内が亡くなり、その遺体の前で悲しいことを悲しいとわき目も振らずに泣けないのか？ 自分の身内の悲しみはまず身内が悲しむのが自然であると思うが。身内の悲しいことを悲しいと泣くよりも、お行為がよいと外国人にほめられることに満足するメンタ

リティーは、ほとんど疎外に近い。

6. 友の肩で泣くー 連帯の強さ

最後に「Real Boys」¹²⁾ という本について触れたいと思う。この本は、本当の人間というのは悲しいときには泣くのがよいという主張をしている。「Real Boys」というのは、1999年アメリカの学校で銃の乱射事件が多発したが、こうした荒れる現代の青少年問題にアプローチするために出された本である。次から次と乱射事件が起こるので、トロントでもこの本が山積になっていた。

この本の主張のポイントは、アメリカの男の子が、男らしさの規範である「Boy Code」にとらわれて、自分の弱さを人前にさらすのを恐れて精神の自由を失っていることの指摘とその治療方法の解説にある。人間関係から孤立して、挙げ句の果てに銃乱射の様な破壊的行動に走るのも、この「Boy Code」という不自然な規範から男の子を自由にしてあげる必要があるというところにある。

最初にアダムという少年が出てくる。彼は級友からいじめられているけれども、そのことを母親に隠し通す。しかし、ある日帰宅途中のバスの中でいじめられて怪我をして返ってくる。それでも本当のことをいわないので母親が食い下がって事情を聞く。最近、勉強が駄目になっていること、何か元気がないこと、そして今日は怪我をしたこと、何か隠していることをきつく問いつめるととうとう「ぼくはいじめられていた」と告白するのである。驚いた母親は先生に相談して問題を解決していくことになる。

特にアメリカの男の子は、なぜ、いじめられていることを人に伝えて助けを求めないのか。著者はここに「Boy Code」という、いわゆるアメリカ人の西部開拓の伝統から、女々しい男は軽蔑され、アメリカの男はマッチョでないといけないという少年規範（「Boy Code」）の存在を指摘する。

ところで、この本によると、アメリカの男子高校生は2つのタイプに分けられるという。スポーツタイプとアカデミックタイプである。1999年のコロラド州コロンバインで、14人射殺、犯人自らも自殺した銃乱射事件の最悪のケースがあった。この事件を起こした2人の男子高校生は、どちらのタイプでもなく、

友達から石を投げられるなどのいじめを受けていたという。その仕返しとして銃を乱射したわけである。したがって、この二人が自分がいじめられていることを誰かにうち明けて相談していたら、そして相談された人間が適切な対応をしていたらこのような悲劇は起こらなかったといわれている。

この本は基本的に、いじめといったような危機的状況にあって、しかも援助を求めようとしない「Boy Code」にとらわれた「マッチョ」な少年への接近方法、救出方法を述べたものである。

印象的な一つケースを紹介しよう。セスは両親と13才の妹の4人家族だった。彼は16才で、高校のサッカーチームのキャプテンだった。彼はチームメイトから尊敬され、学校中の模範生だった。

ある日、母が重い乳ガンであることがわかる。余命幾ばくもないという主治医の診断だった。彼の家族はできるだけのことをするために結束して看病に当たった。特に少年はことのほか母の看病のために尽くした。

「最も重要なことは、セスの同僚が彼らの肩をセスが泣けるように貸したことである。彼の母の毛が化学療法で抜けてしまったとき、放射線治療が効かなかったとき、昼食時間でも、勉強室でも、放課後サッカーの練習に行くときでもセスはオープンに泣いた。彼のそばにはある時は1人・2人が、またある時は3人・4人の友達がいる、彼らの頬にもまた涙が流れていた」。¹³⁾

「友達の肩で泣く」という事に私はひどく感動した。母が不治の病である現実打ちのめされて元気をなくしているとき、友人の肩にすがって涙を流していると友達も一緒になって泣いてくれる。そんな関係を想像していると、人間はそんな友人がいれば、どんな不幸に襲われても生きていくことができるなと思った。「友達の肩で泣く」というのは「武士の魂」ではないかもしれないが、私は日本の伝統でいう長屋文化、町人的な実に素直な性格のあらわれのように思った。

ですから結論めいたことをいうと、人前で泣きもしない・若い夫婦であるにもかかわらずセックスもしないという人間は、そもそも人間が一人では生きていくことができない存在であることを忘れており、人間同士の連帯を失ってしまっているのではないかと思う。「武士は食わねど高楊枝」といったような人間として

自然な要求を無視してやせ我慢をしていたのでは、アメリカの子どものように自分の人生だけでなく、人の人生までも破壊してしまうのではないか。やはりもっと素直に、泣きたいときには泣くということが大変大切である。そして私は、他の人との精神的連帯を取り戻すことを子どもに教えることで日本の大人の、特に父親の復権は可能になってくるのではないかと考えている。巨泉の母が夫をたてていたのは、男尊女卑の日本の古い価値観に従っていたという否定的な面だけでなく、肯定的な面としては、子育てを自分一人ではなく夫と連帯してやっといこうという気持ちの1つのあらわれであったのではないか？「フェミニズム」はこうした夫婦の連帯による子育てを否定している所がある。¹⁴⁾

参考文献

- 1) 山添正 1997 「父性のたてなおし 母性のみなおし」 ブレーン出版
- 2) 山添正 2000 「しつけのみなおし おとなのたてなおし」 ブレーン出版
- 3) 岡本夏木, 山上雅子 2000 「意味の形成と発達」 ミネルバ書房
第9章 山添正 「日本の父親について」
- 4) 富成忠夫 1974 「野草ハンドブック1 春の花」 山と溪谷社 p24-25
- 5) 岡本夏木編集 1979 「育つことのうちそと」 ミネルバ書房
山添正 第6章 「母子関係から父子関係へ」
- 6) Frederick Mathews 1996 The Invisible Boy: Revisioning the victimization of male children and teens. Health Canada.
- 7) 大橋巨泉 2000 「巨泉－人生の選択」 講談社 p74-76
- 8) NHK ETV 2000 「日本人の性－4 セックスレス」 2000年4月21日
- 9) 永六輔 2000 「夫と妻」 岩波書店 p3
- 10) 新渡戸稲造 1938 「武士道」 岩波書店
- 11) 野田正彰 1995 「災害救援」 岩波書店
- 12) William Pollack 1998 “Real Boys” Owl Books p 3-18
- 13) William Pollack p63-64
- 14) 林道義 1998 「主婦の復権」 講談社

この論文は2000年度神戸親和女子大学特別個人研究費の補助を受けて作成されました。